

令和 7 年度 第 3 回朝来市環境審議会 議事要旨

日時：令和 8 年 2 月 26 日（木）

14：00～16：30

場所：朝来市役所本庁舎 西館 201 会議室

<出席委員>

石田会長、増原委員、岡田委員、岸野委員、椿野副会長、天野委員、高木委員、西垣委員、村上彰委員、藤本委員、藤原委員、野田委員

<欠席委員>

清水委員、衣川委員、村上玖仁子委員、小西委員

<事務局>

松本市民生活部長、村上市民課課付課長兼環境推進室室長、波多野市民課副課長兼環境推進室副室長、中屋市民課課長補佐兼環境推進室室長補佐、森本市民課環境推進室主査

<議事>

1. 開会
2. あいさつ
3. 報告事項
 - （1）令和 7 年度第 2 回朝来市環境審議会に係る指摘と対応について
 - （2）朝来市生物多様性地域戦略と朝来市レッドリスト・ブラックリストの作成進捗について
4. 協議事項
 - （1）朝来市の生物多様性の現状と課題について
 - （2）朝来市生物多様性地域戦略の「めざしたい姿」と「基本戦略」について
 - （3）朝来市生物多様性地域戦略の骨子（構成と項目）について
5. その他
6. 閉会

＜報告事項＞

(1) 令和 7 年度第 2 回朝来市環境審議会に係る指摘と対応について

【事務局】 資料 1 について説明。

【委員】 オオサンショウウオ等の河川生物について、ダムは撤去できないので移動の障壁となるが、堰については石を積む等の簡易的な対策で、障壁の解消が可能なものもある。現在、外来種との交雑問題が深刻化しており、ダムや堰は在来種には障壁となるが、交雑個体の拡大を食い止める役割も果たす。ダムや大きな堰の位置と生物の分布を明示することで、交雑個体が侵入した際にどこを重点的に守るべきか判断しやすくなる。

【委員】 河川環境の分断により水生生物が戻れなくなる問題に加え、朝来市内では落差工等の工事の際に保全対策がなされない事例がある。オオサンショウウオは特別天然記念物であり、繁殖場所を知らずに工事を行うことは、コウノトリの営巣場所を壊すのと同様に問題である。保全対策を怠り事故が起されれば責任を問われる可能性もあり、適切な対策を講じるべきである。

【会長】 各委員の意見を踏まえ、事務局で対応を検討いただきたい。

【委員】 中学生のアンケート回答率が高いが、彼らの年代でも生物多様性についてある程度の学習が必要だろう。山東町では、コウノトリの巣塔の下に枝を置くと、その枝でコウノトリが巣作りをした事例があるが、このように環境を整えることが大事。国が推進する農業の基盤整備事業（田んぼの大型化）等の土木工事が環境を損なう恐れがあるため、工事計画に生物多様性への配慮を盛り込むべきである。無農薬農業を実践している地域では生きものが豊富であり、農業と生きものが共生する環境を将来的に持続させる必要がある。

【事務局】 コウノトリの話等はコラム等の形で盛り込みたいと考えている。

(2) 朝来市生物多様性地域戦略と朝来市レッドリスト・ブラックリストの作成進捗について

【事務局】 資料 2、資料 3、参考資料 3-1、参考資料 3-2 について説明。

【委員】 文献一覧にある軟体動物や菌類が、種数集計表に反映されているのか。

【事務局】 軟体動物や菌類の文献収集は行っているが、現状リスト整理は未検討の段階であり、今後検討していく。

【委員】 中学生アンケートについて（学校で「やらされている」面もあるかもしれないが）、彼らが市外へ出た後、朝来市に帰ってきたいと思うまちにするため、若者の意見をじっくり聞くことは重要と考える。

学校は多忙であり、多くの教育テーマを抱えている。探究の時間を中心に、人権教育、平和教育、金融教育、環境等 20 種類ぐらいあり、学校の先生も全ては対応できず、時間も限られている。こうした状況を踏まえ、環境教育については教育委員会と相談し、優先順位をつける必要がある。

市民アンケートについて、ギリギリ 4 割程度の回答率から、中学校と同様に市民の方もやはり忙しいと思ったほうがいいだろう。市民団体の育成の案は総論としては賛成だが、市民活動を支えていた層が減少している現状を踏まえ、新たな活動のあり方を模索すべきである。

一次産業従事者や、専門知識を持つ市民、中学校の科学部等を巻き込んだモニタリングや連携体制を、地域連携の形で構築してはどうか。

＜協議事項＞

(1) 朝来市の生物多様性の現状と課題について

【事務局】 資料 4、参考資料 4-1、参考資料 4-2 について説明。

【会長】 トノサマガエル等のカエル類の減少している実感が、アンケートやヒアリング結果から確認された。

戦略において地域区分を行うことは、市民が「自分事」として捉えるために重要であろう。

既存資料の情報は古いものが多く、現状はさらに減少している可能性がある。戦略の中でそれをどう把握し盛り込むかが課題である。

【委員】 アンケートの自由記述について、参考にしやすいようカテゴリー分類による整理をしてほしい。

【委員】 自由記述について、どの年代の人がどのような意見を持っているか、年代別のクロス集計等を検討してほしい。

【委員】 中学生の回答率が高く、今後に期待できる。

生きものについて、田んぼの生きもの調査を 6 月にやっているが、トノサマガエル等の大型のカエルが減少している実感がある。これらはコウノトリの餌にもなる種である。データだけでなく身近な自然の観察も重要である。

【委員】 アンケートで「タガメ」が挙がっているが、朝来市での過去の生息状況はどのようなのか。

【委員】 タガメはかなり昔にはいた。

【会長】 タガメは全国的に激減しているので、朝来市で生息が確認されれば、大きな発見である。

【委員】 カエルの種類がアマガエルやヌマガエルに置き換わっている可能性はないか。種の構成変化は環境の指標として有効である。

【委員】 水田と豆の畑ではカエルの生活域が異なり、トノサマガエルは地面に近い方で虫等を捕食し、アマガエルは木の上でハスモンヨトウの幼虫等を捕食する等、カエルによって生活域を区別しているところもある。また、山際の水田にはシュレーゲルアオガエルが生息しており、卵が水田の中に浮いている。

【委員】 地域ごとの自治協議会のヒアリングから、朝来市内でも地域差が見られたものはあるか。

【事務局】 山東地域では水田の変化に対する意見、課題が多くあった。生野や奥銀谷地域

は市川の水質のことや魚の減少、かつての鉱山との関わりの話が多かった。和田山地域は 5 つの自治協の合同実施だったため、特定の傾向は見えづかったが、都市化による生きものの変化や課題を挙げる意見が多かった。

【委員】 自治協議会や団体へのヒアリング、先ほどのアンケート等による有益な情報を上手く反映することを期待したい。朝来市内でもエリア（山東、生野、和田山等）によって、農業への関心や都市化の課題等、地域差や特色を反映した戦略としてほしい。

【会長】 市民が「自分事」と捉えられるよう、地域区分による戦略構築を進めるのがいいだろう。

【委員】 ヒアリング等で出されたせっかくのたくさんの意見が、資料で平たくなってしまっている。昔していたこと、現在の状況、どのような未来を選んでいくかを比較して考えられるような資料があるとよい。

【副会長】 生野地域は日本海側（円山川系）と瀬戸内側（市川系）の分水嶺があるが、河川流域ごとの生態系調査やデータ整理は行われているのか。

提示されたデータの多くが 1990 年代等の古いものであり、直近の現状を正確に反映しているか。

【事務局】 今回のアンケートやヒアリングに関しては、流域ごとの区分は加味していない。ただ、河川ごとに整理されている一部の情報については、たどれるようにデータベースで整理している。

データについて直近の調査記録が少ないことは課題であり、市井の研究者から近年の情報をいただき、活用していくようにしたい。

（2）朝来市生物多様性地域戦略の「めざしたい姿」と「基本戦略」について

【事務局】 資料 5 について説明。

【会長】 タウンミーティングで得られた現状や課題に関する貴重な意見も、戦略の「現状と課題」の資料に反映させるとよい。

【委員】 子育て世代は自然環境や環境教育、観察会への関心が非常に高い実感がある。アンケートでは、そういった傾向は見られたか。見られなかったなら残念である。

【事務局】 子育て世代であることが分かる設問を設定していないため、どこまで把握できるかは分からないが、年代別のクロス集計等で確認したい。

【委員】 スローガン案 2 について、冒頭に「何を」楽しみ、学ぶのかという主語（例：生物、多様な生物との共生等）を明示しないと、目的が伝わりにくい。

「楽しむ」「学ぶ」「行動する」「つなぐ」の 4 つの言葉のつながりは、「楽しんで」だり生活する上で自然に人々がする「行動」、プラスアルファとして「学ぶ」と「自然保護」、この 4 つが自然環境の保全につながり、保全することで、更にまた市民のほうに恵みが降りてくるという「循環」だと思われる。よって、4 つの言葉が「めざしたい将来像」に直線的に向かうのではなく、「循環する」というイメージが入っていた方がわかりやすい。自然環境の保全が巡り巡って市民の恵みとして戻ってくる「循環」の視点や、図解において「戻ってくる」イメージがあるとよいのではないか。

アンケートで「人間の生活の方が大事」という意見が結構な数あることにショックを受けた。生活に直結しない自然環境保全には、あまり興味が無いということを示している。自然環境の保全が生活に役立つことを伝える機会や、普段の生活を保全に役立つ形で「アップデートする」という視点が重要である。

アンケートの結果から、自然から恵みを受けていることに気づいていない方が多いと思える。アンケートの大多数の意見に流されすぎず、有識者の知見とバランスを取りながら目指す方向を調整すべきである。

【委員】 他の環境計画と差別化するため、「生きもの」や「命」に関する言葉をスローガンに入れたらどうか。

朝来市の第 3 次総合計画のスローガンである「幸せが循環するまち」は、比較的市民に浸透していると思う。このように、簡潔で覚えやすいフレーズが良いだろう。

市民は、朝来市の自然が当たり前すぎて価値に気づいていない。いきなり「楽しみ、学び、行動」とするのはハードルが高く、まずは「気づいて実感する」ことがスタートではないか。

【委員】 スローガンについて、三田市と川西市を参考にされているが、明石市も今作っていて 3 月には公表されるはずなので参考にするとよい。

「享受」という言葉について、中高生は理解できるはずだがキャッチフレーズとしては少し硬く、口ずさむにはハードルが高い。

「自然の恵みが我々の生活を支えている」ということへの気づき、あるいは「循環」や「つながり」という考え方を盛り込むことは私も重要と考える。先ほどの意見のように、自然環境の保全が人と人をつなげて、“未来”につながるというだけでなく、自然の恵みが循環して人の方に来る、というようなニュアンスも入れられるとよい。

基本戦略については、バックカスティングでぜひスローガンから導き出せばよいと思う。

この将来像や基本戦略、目標等は、何年後くらいの状態をイメージするのかという説明が無かった。国は 2030 年を目標年としているが、この戦略は 2026 年度に策定し、施策を実行していくのは 2027 年度からだと思うので、2030 年までの 4 年後を目標とするのはもったいない。イメージする目標年を教えてください。

【事務局】 現時点では、計画期間は 10 年間で考えており、必要に応じて見直しをしていきたい。

【委員】 行政側が「楽しむ」ことを重視している印象を受けるが、順序としては「学ぶ」ことが先にあるべきではないか。

【委員】 （事務局や委員の想いも大切だが）ベースとしてこれから詳細に行うアンケート分析の結果から見えてくるものもあるのでは。そこからスローガンを導き出すべきである。

【会長】 「豊かな自然」「恵み」「わかちあう」「つなぐ」といった言葉の重要性を認めつつ、基本戦略の言葉を無理にスローガンに盛り込む必要はなく、副題等で活用するのが綺麗ではないか。

生きものに興味がない層に対し、自分たちの暮らしとの関連性や、保全によって暮らしが良くなることを理解してもらえるような戦略にしたい。

案 3 が比較的妥当に感じるが、スローガンは戦略の理念を簡潔に示す重要事項であり、今回の会議で決定せず、アンケート分析を深めた上で次回に継続協議としたい。

(3) 朝来市生物多様性地域戦略の骨子（構成と項目）について

【事務局】 資料 6 について説明。

【委員】 豊岡市のコウノトリのように、朝来市でもオオサンショウウオ等を象徴的な存在として設定することで、他市との差別化やメッセージの明確化が図れるのではないかと。あるいは、山東町はコウノトリ、生野・朝来はオオサンショウウオといったように、地域ごとに象徴的な生きものを分けることも検討してはどうか。

【事務局】 市の特色：朝来市は「ありふれた自然のレベルが高い」ことが有識者からも評価されており、特定の一つ（切り札）だけでなく、複合的な魅力として推していく方向で検討したい。

地域別に象徴的な生きものを設定する案は非常に興味深いため、検討課題とする。

【委員】 ページ数が増えすぎると読まれなくなる恐れがあるため、概要版での適切な情報発信が必要ではないか。

骨子案の「産業」項目において、単なる農家数だけでなく、農地生態系と関わりの深い「コウノトリ育む農法」や有機農業の取組面積等、環境に配慮した農業のデータを追加してほしい。

戦略のまとめとして、「人と人」のつながりや、自然の恵みが自分たちの生活を支えているという「循環・つながり」のニュアンスを盛り込んでほしい。

【事務局】 本編のボリュームが増えることを踏まえ、市民が手に取りやすい概要版を別途作成する予定である。

【委員】 有機農業においてカブトエビやカイエビが水を濁すことで雑草を抑える（抑草効果）等、生きものを大切にすることが農業上のメリットにも繋がっている事例を、戦略の中で紹介してほしい。

【会長】 生きものに関心がない層に対しても、保全が自分たちの暮らしを良くすることに繋がると伝わる戦略にしたい。

以上